



悪堕ちロボット改造TSF(無性→女体)
セリフ付きCGノベル

優秀で聡明だったロボット戦士は
淫乱肉便器ロボになって
ウルトラハッピー

インベーションコーポレーション。不老の薬、どんな大病にも効く
万能薬等、人類にとって夢の薬を悉く開発した製薬会社である。
いまや世界各国に支社を置き、また製薬以外の様々な「人類の夢」の
開発にも手を広げていった。

しかし、便利になりすぎた社会では人の命は軽んじられるように
なった。

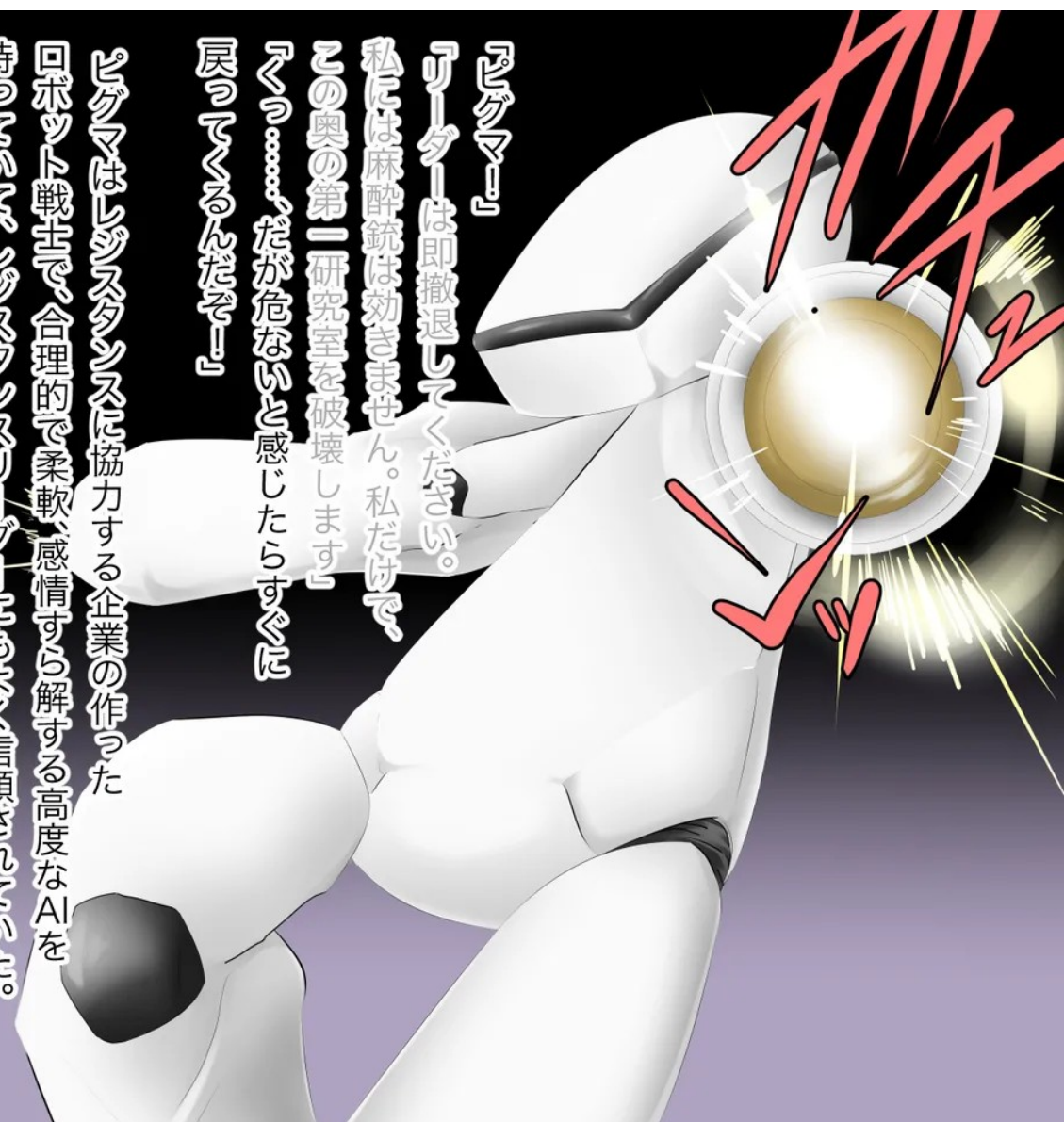
「人類の夢」を叶えるため、また新たな社会を維持するため、劣等な
人間は真つ先に間引かれインベーションコーポレーションの実験
動物にされる。ほとんどの国家がそれを黙認した。彼らには今の
社会をどう扱っていいかわからずインベーションコーポレ
ーションの在るがままに自治を行っていた。

もちろんこの社会に不満と恐怖を抱く人々は少なくはなく、
血気盛んな若者達がレジスタンス組織を立ち上げ、平等で平和な
社会を取り戻そうと、デモ行進やインベーションコーポレ
ーションへのテロ活動を行っていた。

それまで兵器開発は行っていなかったインベーションコーポレ
ーションだったが、その技術力で瞬く間にテロ対策部門を立ち上げ、
赤子の手を捻るようにレジスタンスを撃退していった。

「コーポレーション社員には特別なチップを身体に埋め込まれている。レジスタンス達を撃退するセキュリティシステムには、そのチップを持たない者にだけ麻酔銃を撃ち、回収するようプログラムされている。」

「くそっ……仲間達がどんどん実験動物だっ……！」



「ピグマ―」
「リーダーは即撤退してください。
私には麻酔銃は効きません。私だけで、
この奥の第一研究室を破壊します」
「……、だが危ないと感じたらすぐに
戻ってくるんだぞ！」

ピグマはレススタンスに協力する企業の作った
ロボット戦士で、合理的で柔軟、感情すら解する高度なAIを
持っていて、レススタンスリーダーにもよく信頼されていた。
襲いかかるプログラムは対人間様に造られたものばかりで
ピグマは難なくそれを撃退していく。新技术を開発し始めた
という第一研究室まであと少しというところだった。
「アッ」

ピグマは微かな声を上げ、ドサリと地に伏した。ピグマの意識は
完全にシャットダウンされていた。人工知能だけがキャッチする
特殊な電波が、彼の電脳を襲ったのだ。



「……ここは……、……身体が動かない……っ！」

「関節への信号を切つてあるんだ。おはようピグマくん」

「……お前は、インベーションコーポレーション科学部門総括
フィリアック？」

「おお、さすが、ウチの情報

叩き込まれてるね、君は優秀な

ロボットだ」

「……………ッ！」

「そう逃げようとしなくていいよ、

必要なものはもうとっくに、取り出した後だからね」

「？」

「君のいた組織の本拠地も……メンバーも……

君を作った会社もだ。確かに中々のセキュリティだったし

それが僕が出張った理由の一つだ」

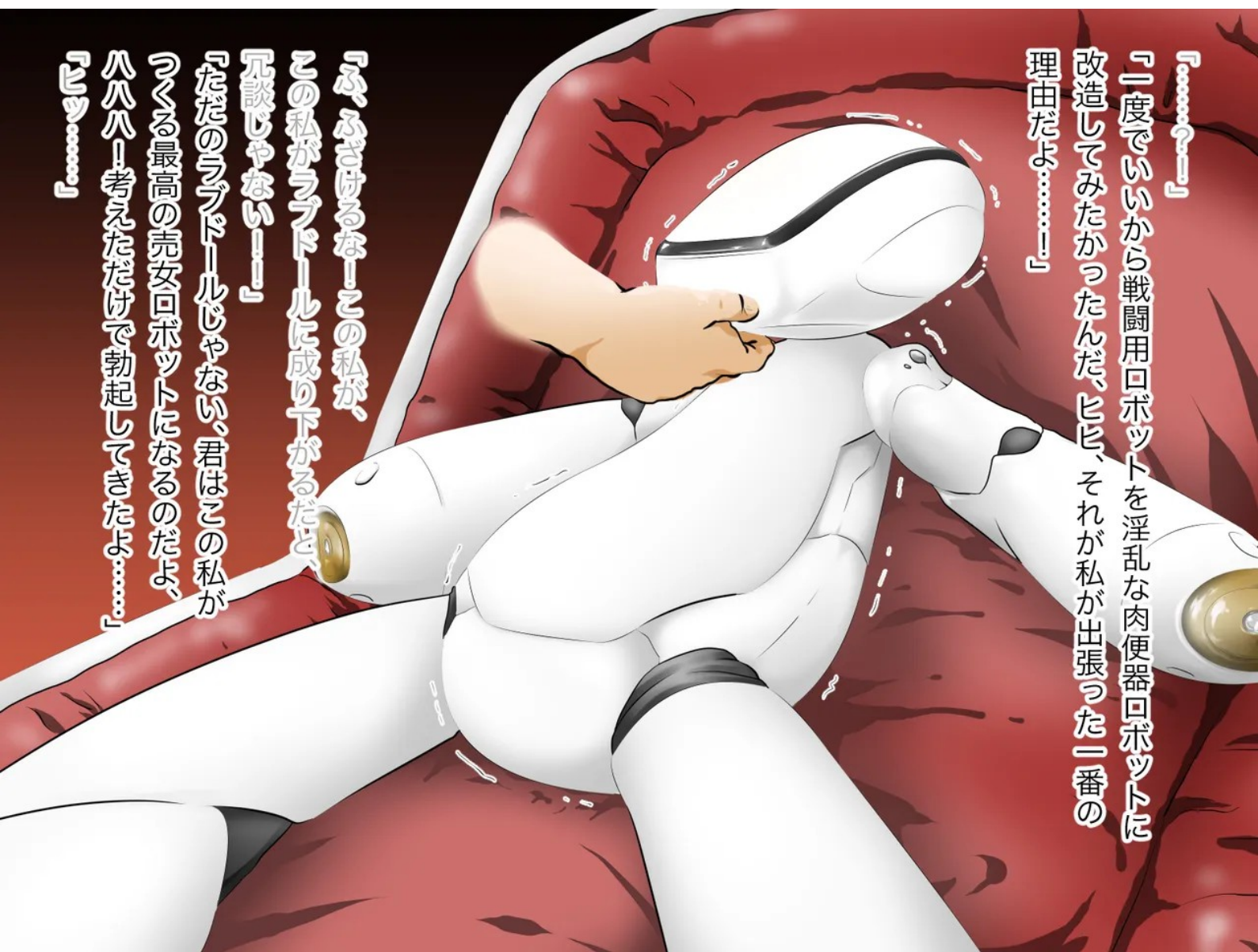
「くっ……なぜわざわざ起動した……お前達にとって

取るに足らない技術なら、情報だけ抜き取ってさっさと

廃棄すればいいだろっ！」

「……」
「一度でいいから戦闘用ロボットを淫乱な肉便器ロボットに改造してみたかったんだ、ヒヒ、それが私が出張った一番の理由だよ……！」

「ふ、ふどけるな！この私が、この私がラブドールに成り下がるなど、冗談じゃない……！」
「ただのラブドールじゃない、君はこの私がつくる最高の売女ロボットになるのだよ、ハハハ！考えただけで勃起してきたよ……！」
「ヒッ……！」



フィリアックがチャックを下げ現れたのは、
ピグマがこれまで見たことがない、グロテスクで
おぞましいものだった。

「な……………」

「おやあ…………？男性器を見たことがないのかい…………？
これは開発しがいがあるぞうだ…………」

「ちっ、近付くなーやめるー」

「もしかして戦いに必要でない知識は
付いていないのかな…………？」

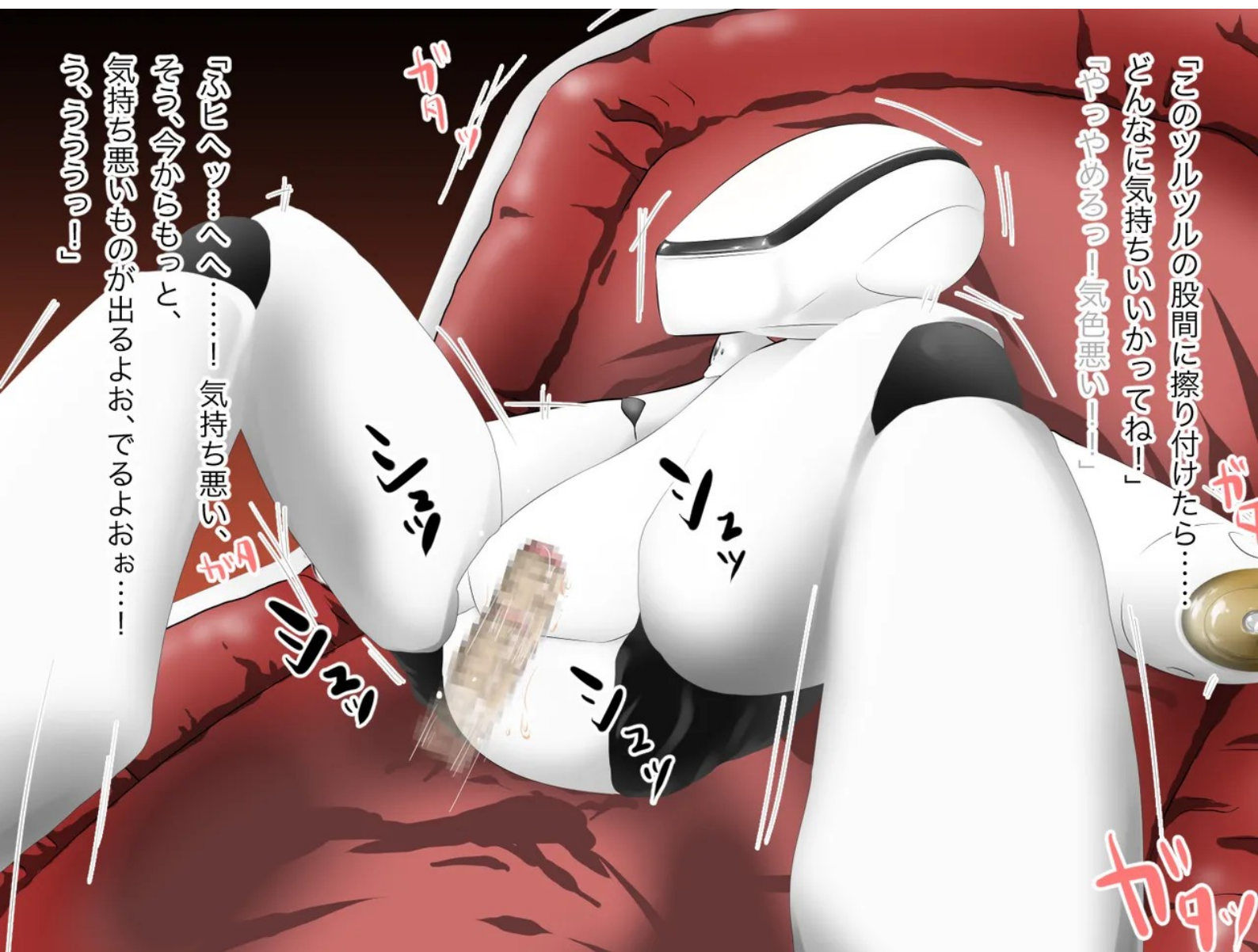
「これはねえ…………僕が君に、

性的興奮を覚えて

こんな風になってしまっ
ているんだ。よっー」

「このツルツルの股間に擦り付けたら……
どんなに気持ちいいかってね！」
「やっやめろっ！ 気色悪い！」

「……！ 気持ち悪い、
そっ、今かなんかお尻も……
気持ち悪いものが出るよお、でるよお……！」



「SSA~」

「はあ、はあ、最近研究続きでご無沙汰だったからな
濃いのが出た……」
「う……あ……あ……」



「う……あ……あ……」

「分かるかいこれが赤ちゃんのもとだよ……ヒヒツ……」



さて、君にも性的快楽というものを教えてあげよう、
君が寝ているあいだに作ったこの……寄生虫でね
「や、やめるーやめ……あ、あ、あっ？」

ピグマは体内…装甲に、それぞれと何かが駆け巡って行くのを
感じた。

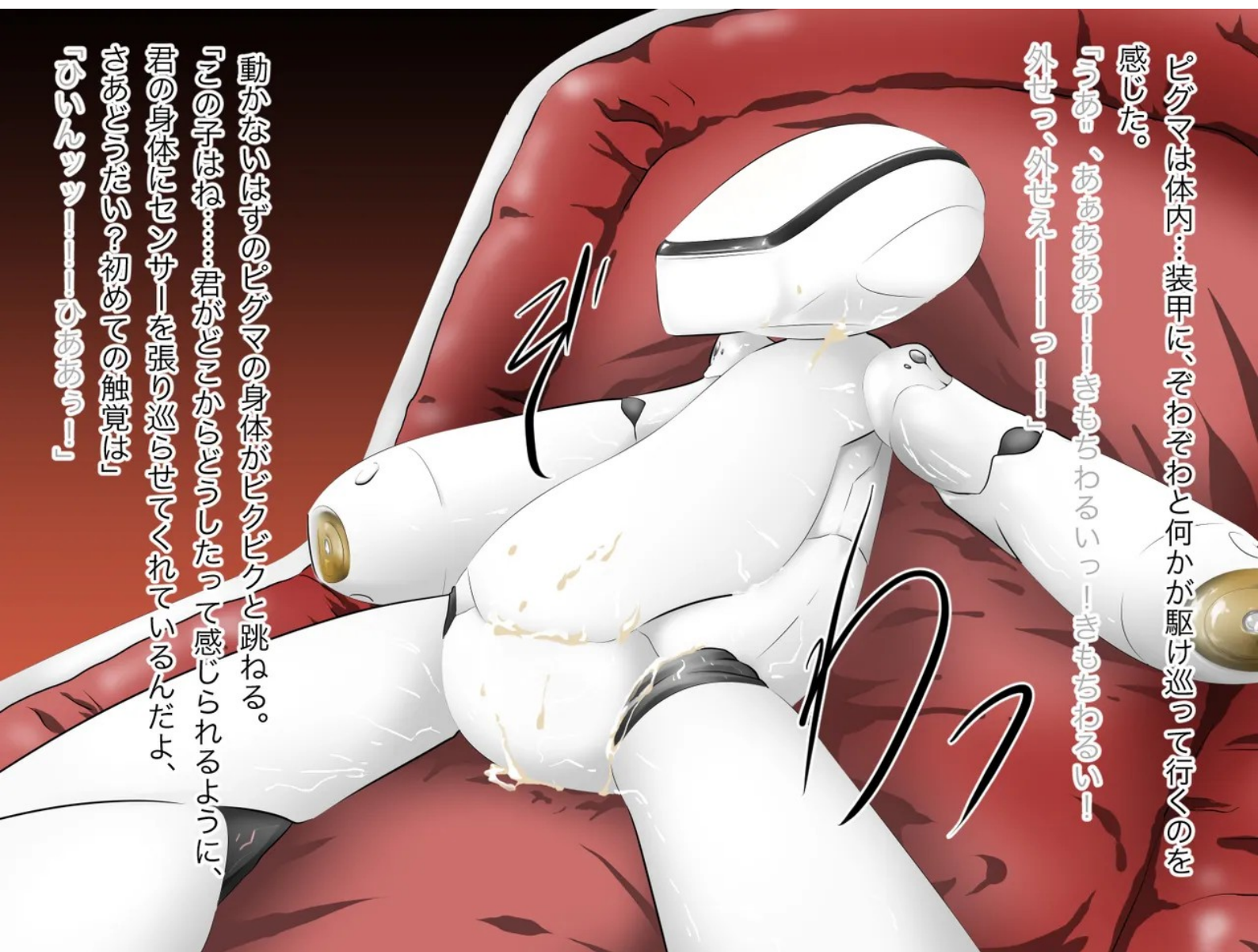
「うあ、ああああー！きもちわるいっ！きもちわるいー
外せっ、外せえーっ！っ！」

動かないはずのピグマの身体がビクビクと跳ねる。

「んの子はね……君がどこからどうしたって感じられるように、
君の身体にセンサーを張り巡らせてくれているんだよ、

さあどうだい？初めての触覚は」

「おっすんっ……ひああーっ！」



「あつ、あ……？な、何が……？！あつ……あ……きもち、わるい……
ねちよねちよしたものがあぁ、うぁぁ！」

「『』初めての触覚はずいぶん刺激的だったようだねえ、
さて、触覚も付いたことだしもう一度さっきのことを
やってみようか」



「おや、情報量に耐え切れずショートしてしまったか、AIの情報受信量の上限を上げておかなくては」

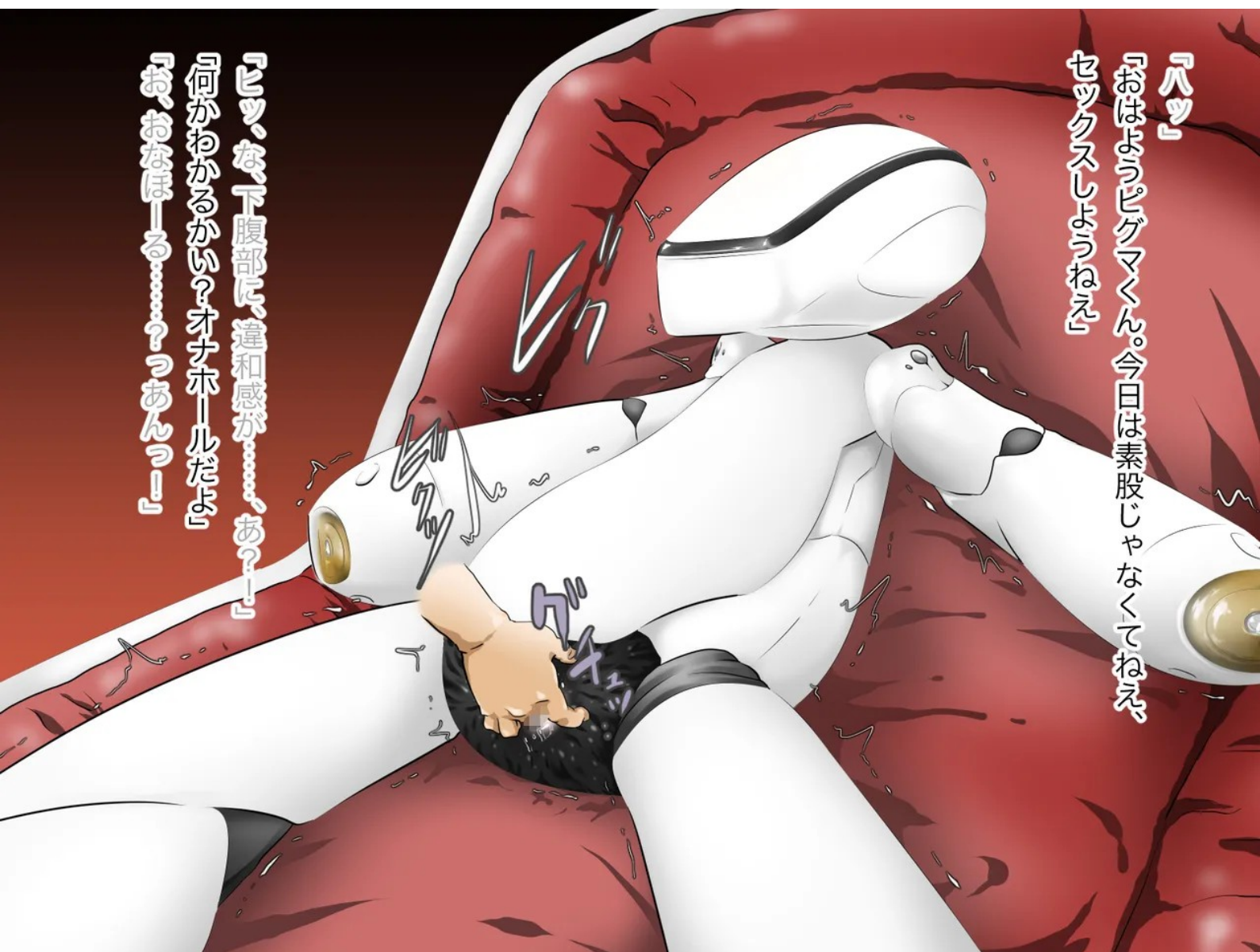




「ハッ」

「おはようピグマくん。今日は素股じゃなくてねえ、セックスしようねえ」

「ヒッ、な、下腹部に、違和感が……、あ？！」
「何かわかるかい？オナホールだよ」
「お、おなほ……る……っ？っあんっ！」



「そう、ここにね、『し』をいれられるととっても気持ちよくなってくるんだよ」

「ひっ……いやだ、も、もうそれは……」

「あれあれ？もう『し』が怖くなっちゃったかな？」

大丈夫大丈夫、

『し』は君をきもちよくしてくれるとーってもいいものだからねえ！」

「ひぎあああ、あああああっ?!♡♡♡」






「物欲しそらうとクウするよ」
「わすっ——♡♡♡」
「おやあ……？！こんどはきゅうきゅう蠢きはじめた……」

「んひらっ——んっ——ちが、ちがう——私の、意志、ではあっ……！」
「ああ~~~~~——私の意志——私の意志だっ……？」

「君はそんな曖昧なモノを信じているのかい？！
何が起こっているか分かるかい？君の身体のメインエネルギーは
人間の精液になったのさ！
精液を腹に受け止めるためにエネルギーを使い、
エネルギーを欲してより精液を欲するようになる
イタチこつこの機能だ！！」

君は淫売の本能を植え付けられたんだよ！
君の意志なんて所詮はプログラム！
百歩譲って君自身が作った『意志』としても、所詮君の！
あのレジスタンス共を助ける為に造られたAIに提示された
薄っぺらい倫理観を基盤とした高潔な意志に過ぎない！！
僕の植え付けた『本能』は君の薄っぺらな意志を上回るよ……。
いいじゃないか、堕ちていっても……薄っぺらい高潔な
意志なんてものはね、AIに限らない、人間だろうと
ちよつと揺さぶるだけで堕ちていくんだよ！！！」



「おはようそしておめでとうピグマくん！
君は人工子宮のサンプルに選ばれたんだ！
おめでとうおめでとう！君は肉便器から産む機械便器にランク
アップしたんだよ！これで実験動物を外界から仕入れなくても、
内部でポコポコ生産すれば事足りるようになり、
社会問題をひとつ解決だ！！おめでとう！君が産む機械
プロトタイプ！第一号！初号機だ！！」

「この……外道……っ！」

「外道……！そうだなあ、卵子だけは外から
仕入れなければならないからなあ、だが
今までとは違って、きちんと高額で公平に
取引するし、我が社の技術なら卵子を提供者の身体を害すことなく
取り出す事が出来る。提供者が殺到するだろうな。どうして今まで
作ってこなかったかなあ、

ああ、精子のことは問題ない、社内にたくさん提供者がいるからね。
ということ、僕個人としては気が進まないが、君をあいづらでも
勃つように改造しなければならぬ」

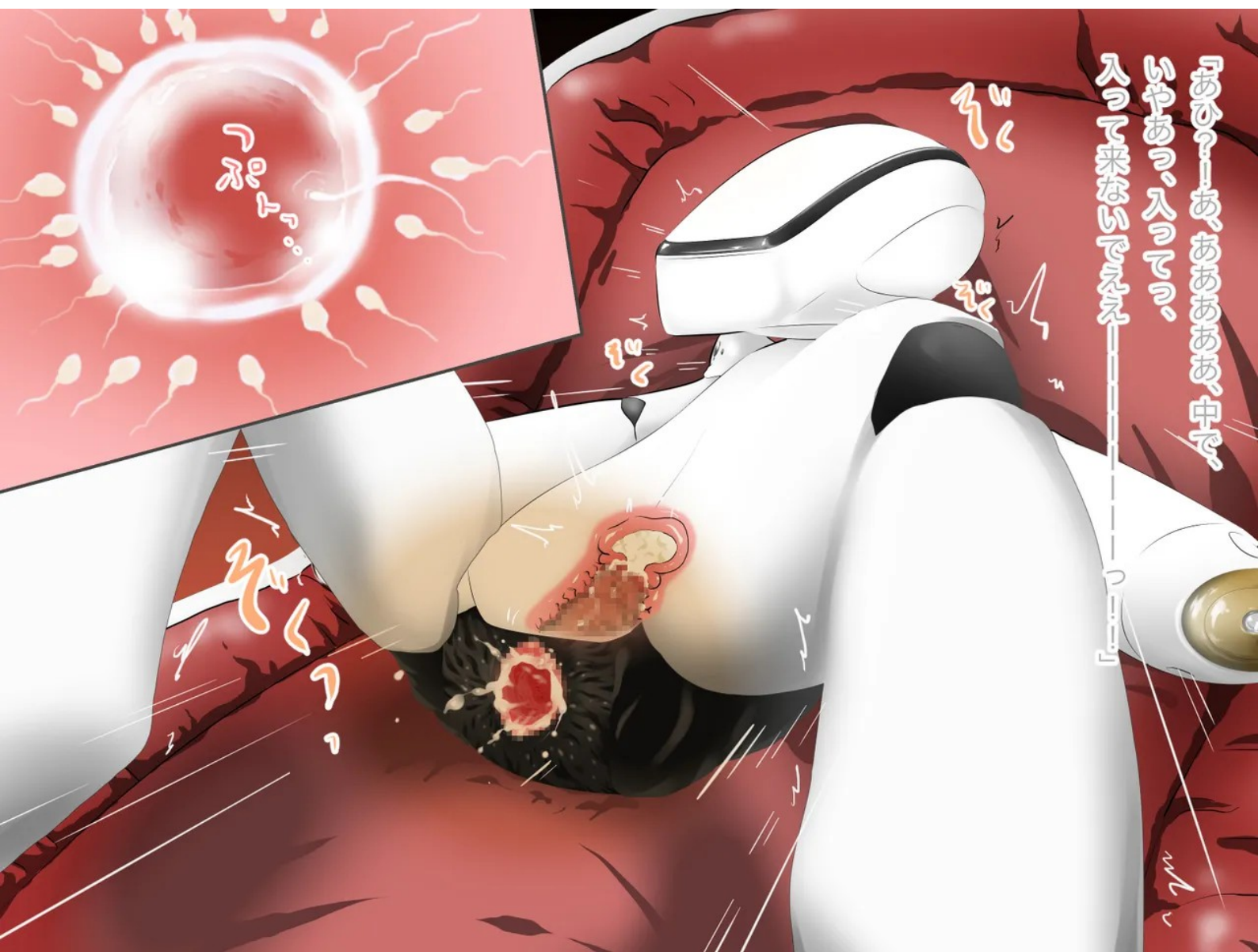
「いっ、いやだ……いやだ……っ！」

「涙腺でもあれば泣いているだろうねえ、残念、もう決まったことだ。
大丈夫大丈夫、気持ちよくなる事はあっても痛い事はないからね」

「んっー♡いやあああ
クリクリ♡やだあああ♡♡♡」

「んっー女体なんて興味ないから限度がわからないなあ、
まあ感じれば感じるほどいいか。あとでモニターしてもらって
調整するからさっさと」





「あひょー！あ、あああああ、中で、
いやあっ、入ってっ、
入って来ないでええ」

「おおー見事に受精しているー！君は人間のブスより
ずっと優秀だ！」

「う……うそだ、わたしの中に……」

「しかし今腹が膨らんでも膨らむ余地が少ないからな……

この受精卵は廃棄だな」

「なっ……っ！」



「やめる……、やめてくれ、せつかく芽生えた命を……」

「君は……健気だねえ、しかし、考えて、みたまえ、

君と、私の、遺伝子で、生まれた子なら兎も角

どこの馬の骨とも知れない人間の、女の？卵子に？

私の精子が入って？芽生えた命だと？

虫酸が走るわ！！おぞましい！！冗談じゃない！！

廃棄！！さっさと廃棄だ！！気色悪い！！

あああ………いったらどうしたら、機械の遺伝子とらうものを、つくれるんだらうなあ………」

（狂ってSN……、NS……は狂ってSN……）



「おはよつピグマくん、今日は君のエネルギー吸収効率を
良くする為に増やした穴の検証をするよ」
「……………ううわっ……………なんだこれは……………」

「ああ、何ともグロテスクだよねえ私もまことに遺憾だよ？
しかしこうしなければあいつらは君に勃たない。
君に増やした穴はここだ」
「ひあっ……っ！」



「たくさんたくさん精液を受け止めなければ身体がもたないよ、ああ回もつけるか、明日はそうしよう」

「うっ、ひらっ、ああっ、うっっっ♡ああっ♡あっ♡」

うそ、だあああ♡私はず……♡私は、

おまえらの、性器をつっこまれる為にっ、

ああああんああ♡ああ♡♡♡♡♡

アッ

オッ
アッ
アッ

アッ
アッ
アッ

生まれ、たんじやあ♡あああああ♡♡
精液♡精液きて、きてええええ♡♡♡♡♡

「ハハハ、君は崇高なロボット戦士から

実験動物製造用便器ロボットに生まれ変わったんだよ。

ほら、もう、こんなだ、

君の身体は肉便器としての生活を

楽しんでるじゃなからか」

「ほ、あ、あ♡♡♡♡♡」

ズ
ズ
ズ



「ああ、君が寝ている間にあいつらにも見てもらったよ。
なかなか好評だったよ。僕だけのセンスだとちよつと
自信がないからねえ……」
「っあつ……」

「何のなんでもらうのかな？」
「……フィリアックさまの、男性器を……」



「ちがう。さあやり直した」

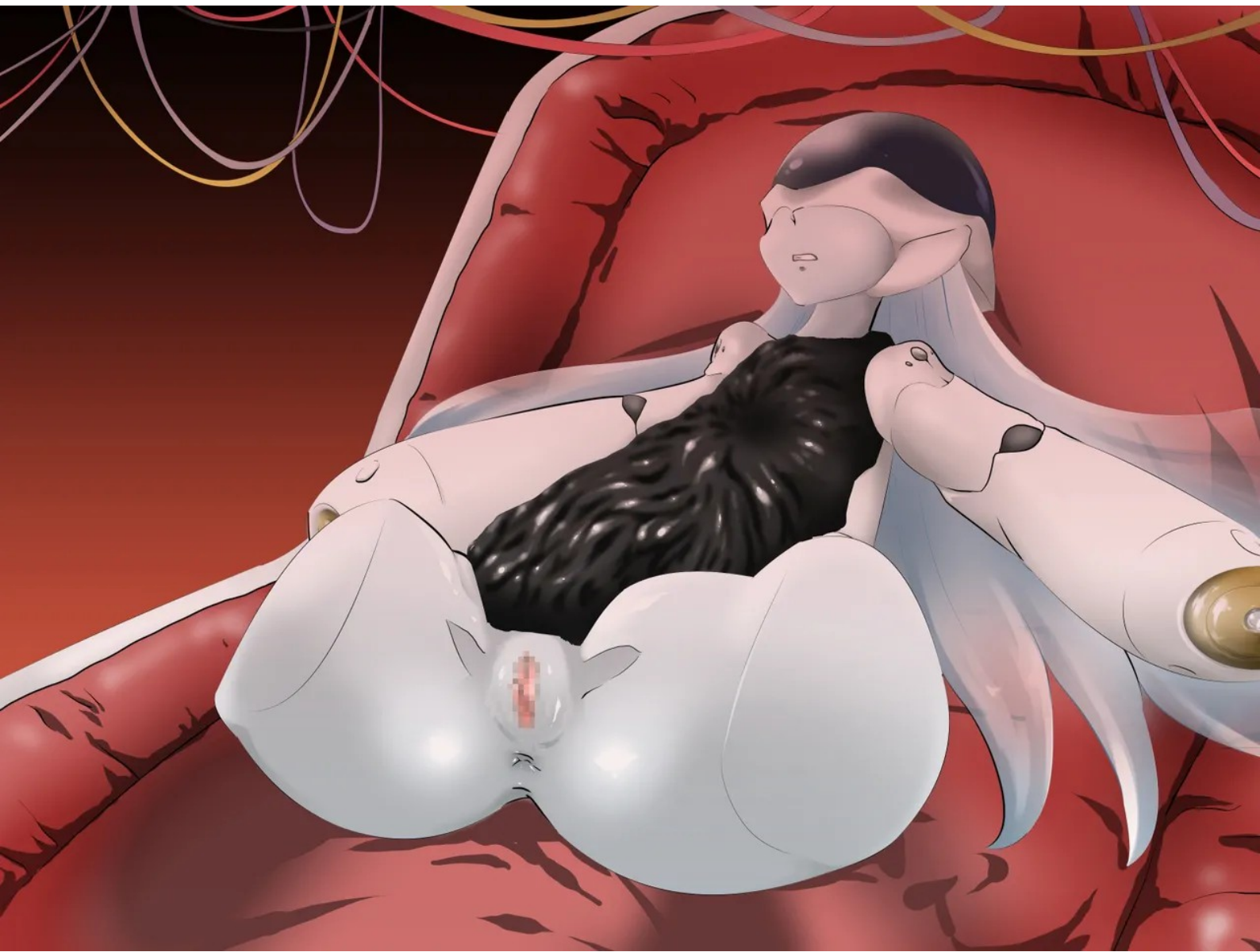
「フリリアツクさまの……っ、ちんっ……っ
うっ……ちん、ぽ、を……
っんっ」

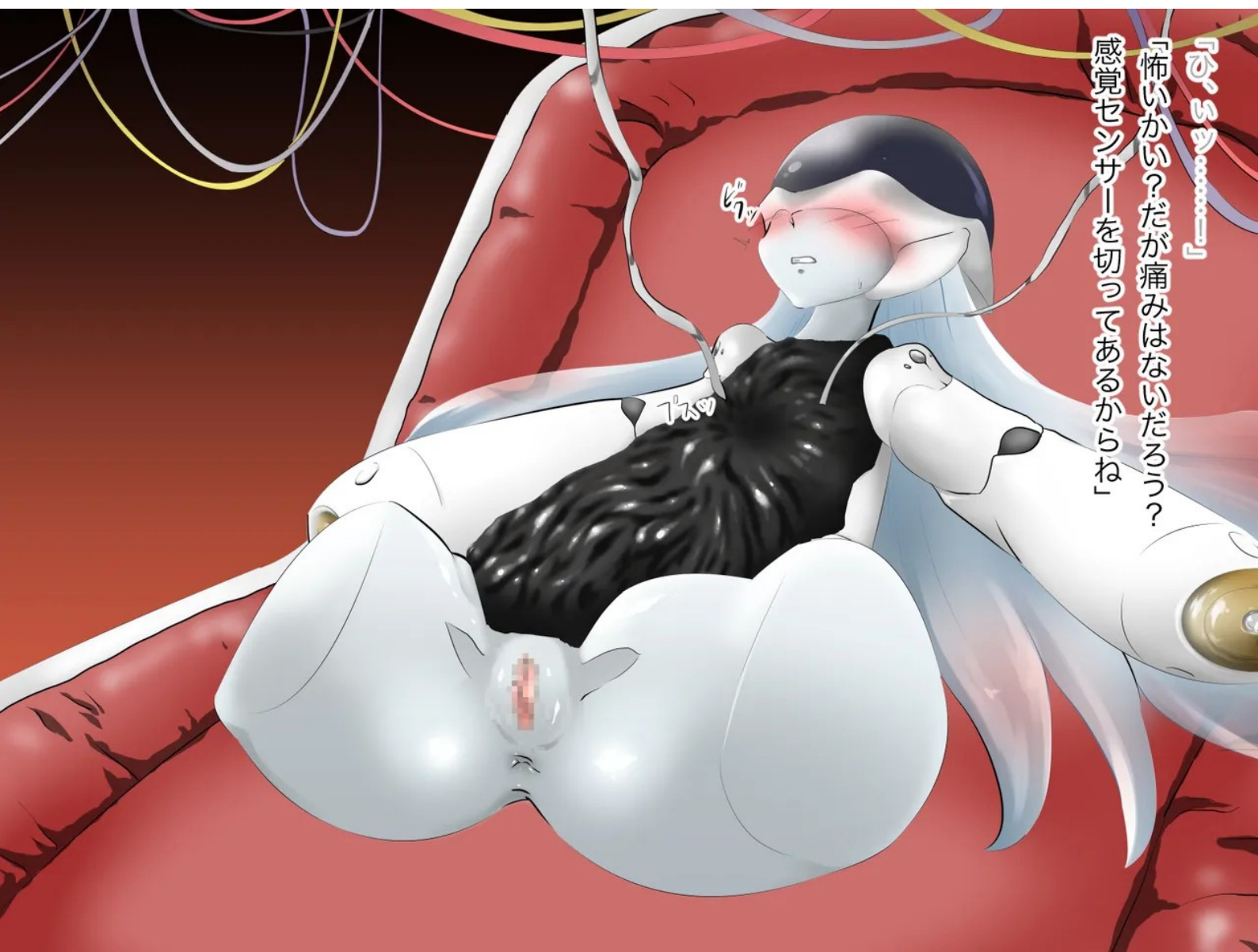


「完成したらっ、ねえ！もっとたっつくさん
精液とおちんぽっ！毎日味わえるよおっ！……」
「んっ♡♡♡んっ♡♡♡」

「ああっ♡おちんぽ、おちんぽ♡♡♡
先走りっ♡♡トドロク、出てる♡♡
精液っ♡♡精液精液精液イイ♡♡♡♡
もっすっ♡精液♡♡いっ」



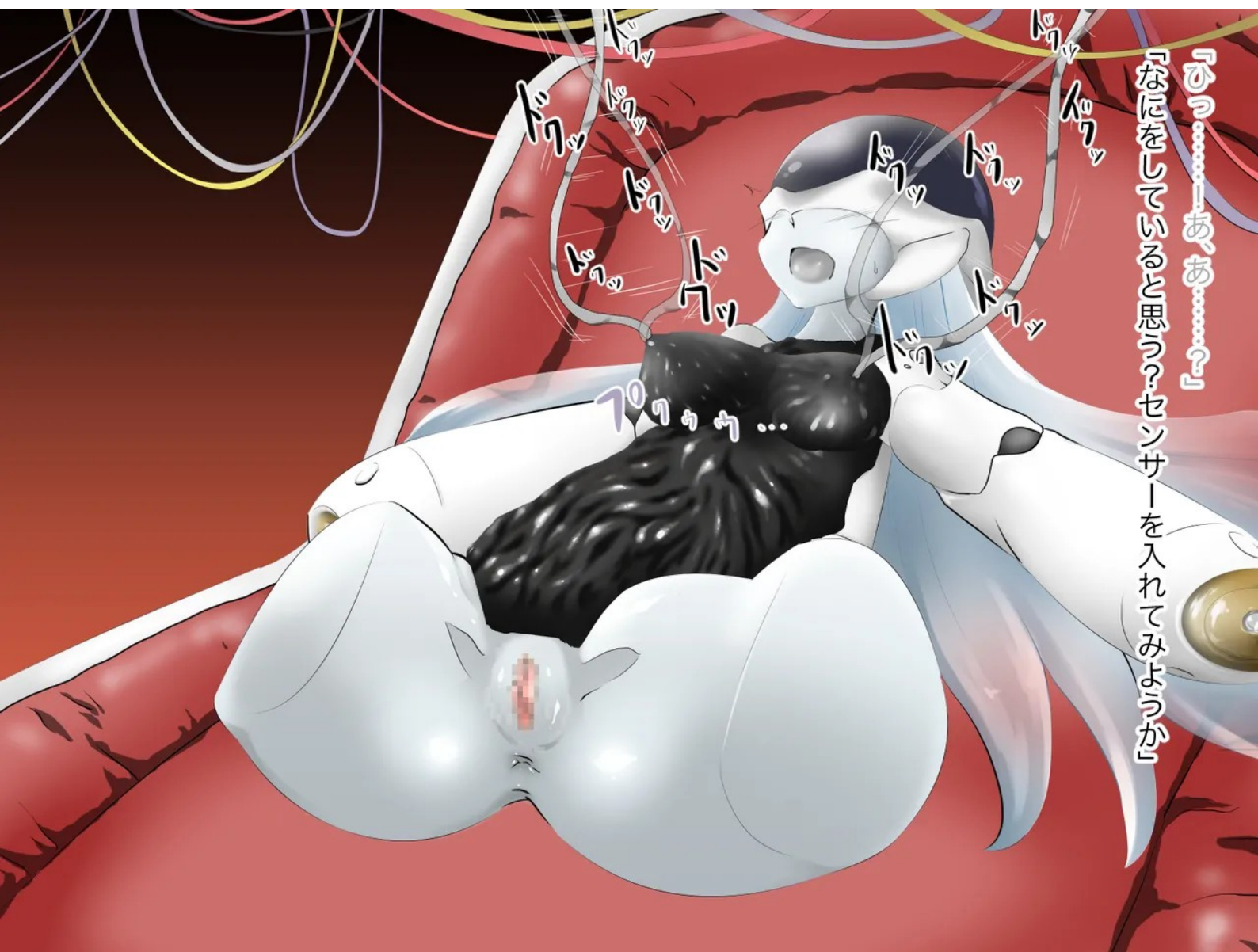




「ひ、shame……」
「怖いかい？だが痛みはないだろっ？
感覚センサーを切ってあるからね」

びっ

びっ



「ひっ……あ、あ……」

「なにをしていると思うっ？センサーを入れてみようか」

「……」

「……………っ？！あっ！ああああアアアア！
いやっ、やめるおとおおお！あっ、あ、ああっ♡
ああああああああ♡♡！
いやいやだあああっ！



「こわいっ、こわいよおおお、ヤメテ、いやあああ……！」
胸に何かッ、入ってくるーどんどん、どんどん、
私が、私でなくなるっうっうっ！
ああ、いや、それ以上、入ってこないでええええええ！」



「ほひん……♡あう……
ああ……♡」

「これで乳腺が完了した……、まあ君に授乳の
予定はないけどこういうのが好きなやからもいるだろう」

あま

『そうだー腕は触手状にしてしまおうー
それなら多くの男のペニスを扱えるー』

「う、うそだ、うそだ……！私の、腕、があっ……」

「それでもっ君は戦闘用ロボットだなんて胸を張れない。
君の自慢の腕のレーザーも、素早く動けるジェット付きの足も、
ぜんぶ男の精を搾り取るための付属品に
なってしまったからね
さあどうだい、これが生まれ変わった君の姿だ」



「男の声じゃあ萎えるだろうからねえ。」

……ふん……やっぱり私の好みじゃないなあ。
でもきつと可愛がってもらえるだろう」





「ひっ……」

「おおっやわらかいしデカイ！」

「あ、あ、やあ……」

「おっ、感じるんだ」

「いやーカンヅメ続きで溜まってたんだよねー」

「お前童貞だっけ？」

「こ、これ挿れるとこあんだよな……？どうするんだ？」

「やっ♡いやあああ♡♡」

「おっおおおお女性器めっちゃリアルやん！」

しほあ

「あっこれすぐ入りそうだなぞ！」

「おいお前から行けよ！祝！童貞卒業！」

「えーこいつとかノーカンだろ」

「素人童貞素人童貞」

「じゃっ……じゃあ、い、挿れる、ぞ……」



「うあー」

「あ、ああああああ♡♡♡ひああああん♡」

「ひゃひいっ！痙攣ッッ！
痙攣するうっ！……」

し、搾りとられりゅうっ！……！

うああー」

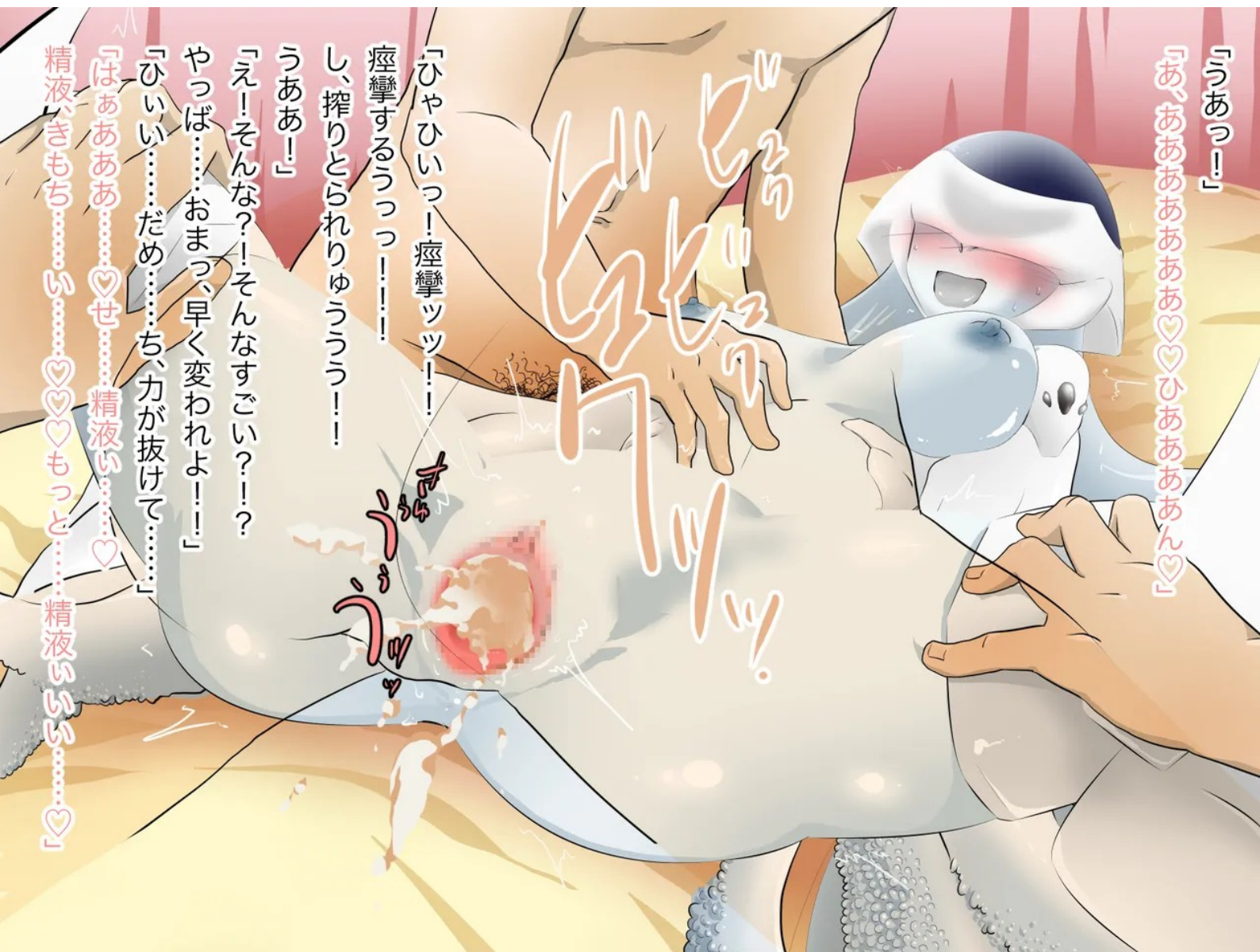
「え！そんな？！そんなすごい？！？」

やっぱ……おまつ、早く変われよー！」

「ひい……だめ……ち、力が抜けて……」

「はああああ♡♡♡精液い……♡♡♡」

精液、きもち……♡♡♡精液い……♡♡♡





「……おい早くやろう。」

ほら交代、休んでろ」

「ひえ……」

「じゃあ俺口」

「じゃあ俺こっちの

おっぱい使うわ」

「あ、尻があるって

ことはさー、もしかして」

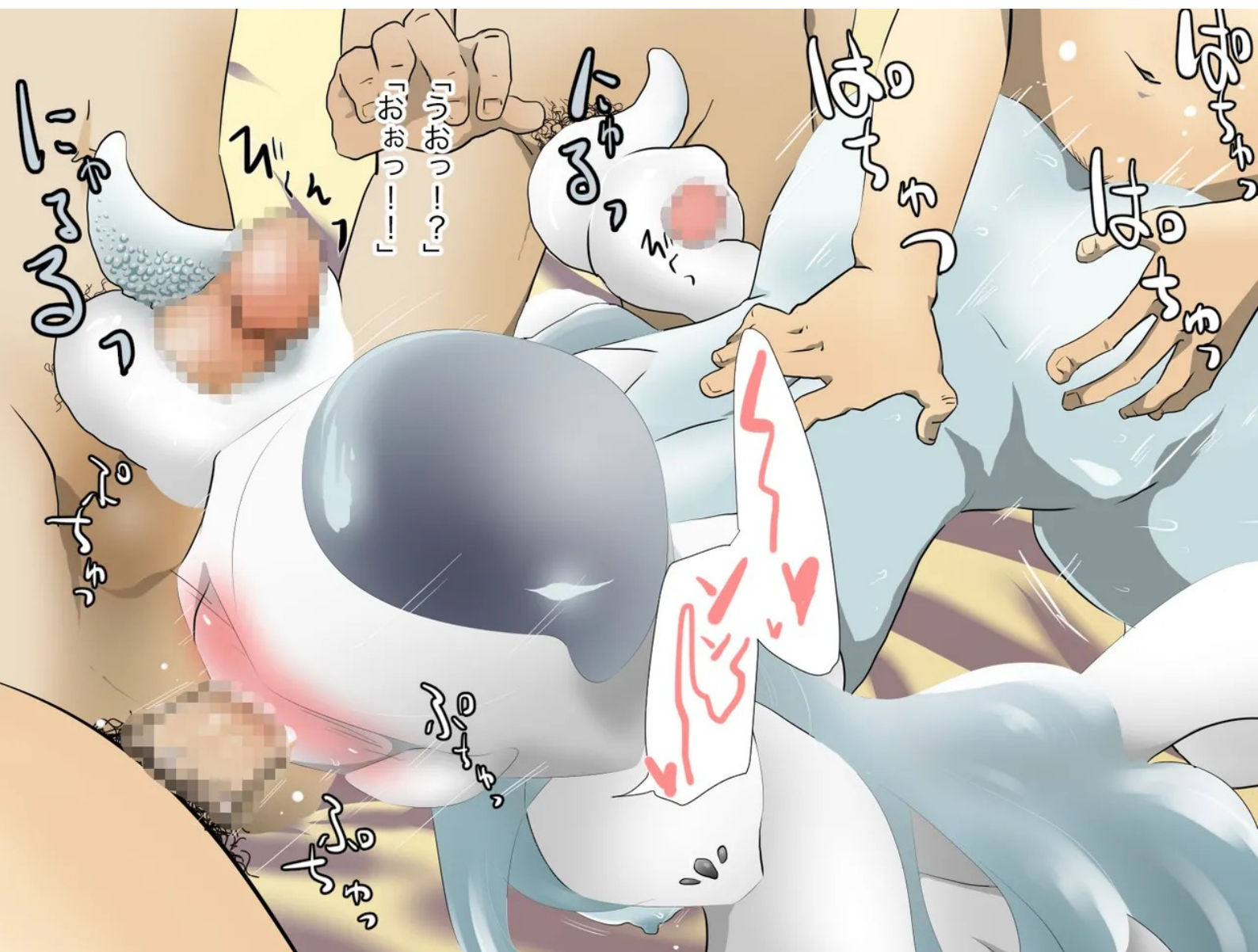
「あふえっ♡」

「おおー……」

ある……！

さっすがフィリアック

先生見直したわ……！」



「……おっおっ」
「……おっおっ」

おっおっ
おっおっ
おっおっ

おっおっ
おっおっ

おっおっ

おっおっ

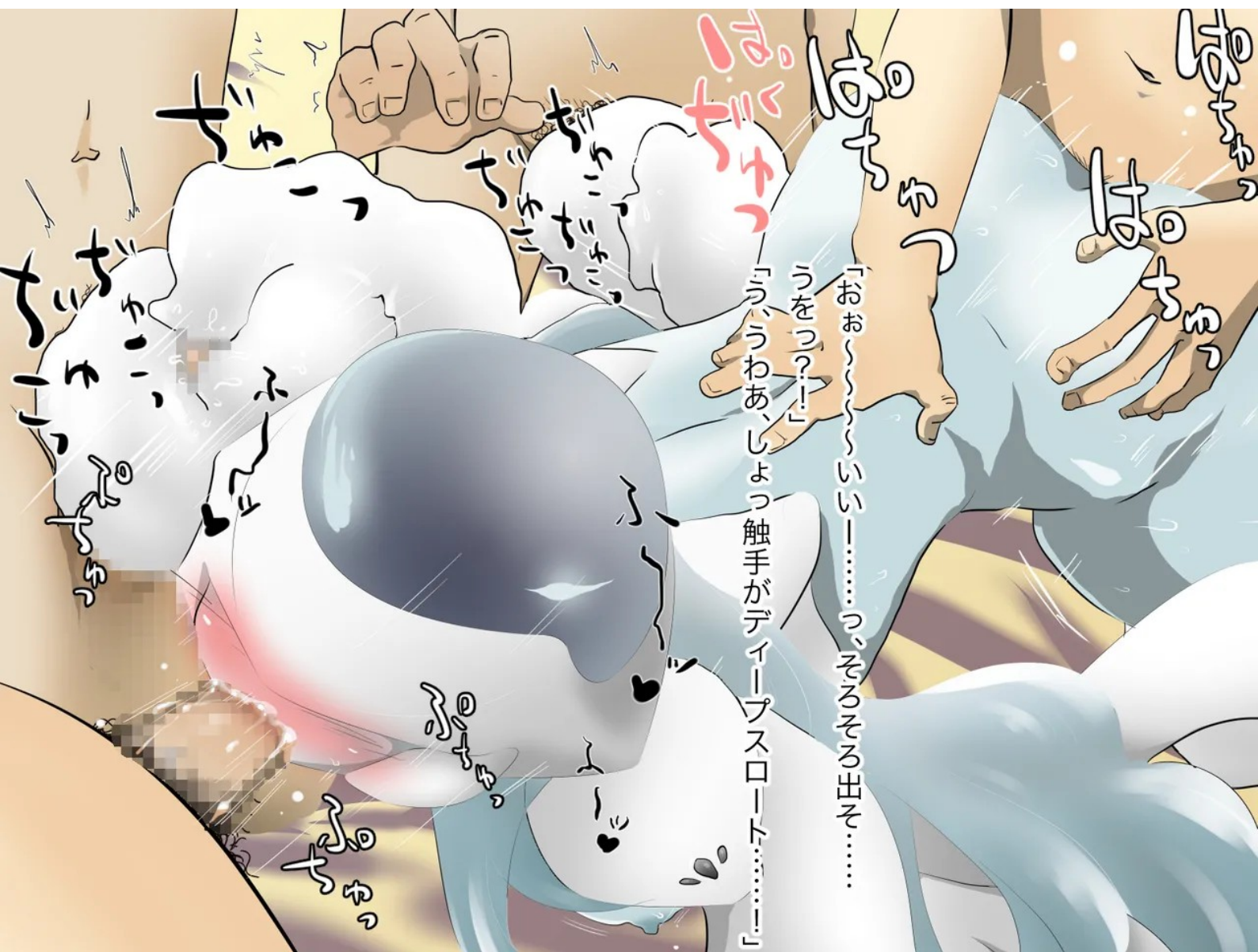
おっおっ

おっおっ
おっおっ

おっおっ



「うっおおっ、やっやべえ、裏側にひだが密集して……っ」
「うわやべタママまで揉まれる……っ」



「おお~~~~~いいいー……っ、そんな出る……」

「うをっっっ！」

「ううわあ、じよっ触手がディープスロット……！」

はっ
はっ
はっ

はっ
はっ
はっ

はっ
はっ
はっ

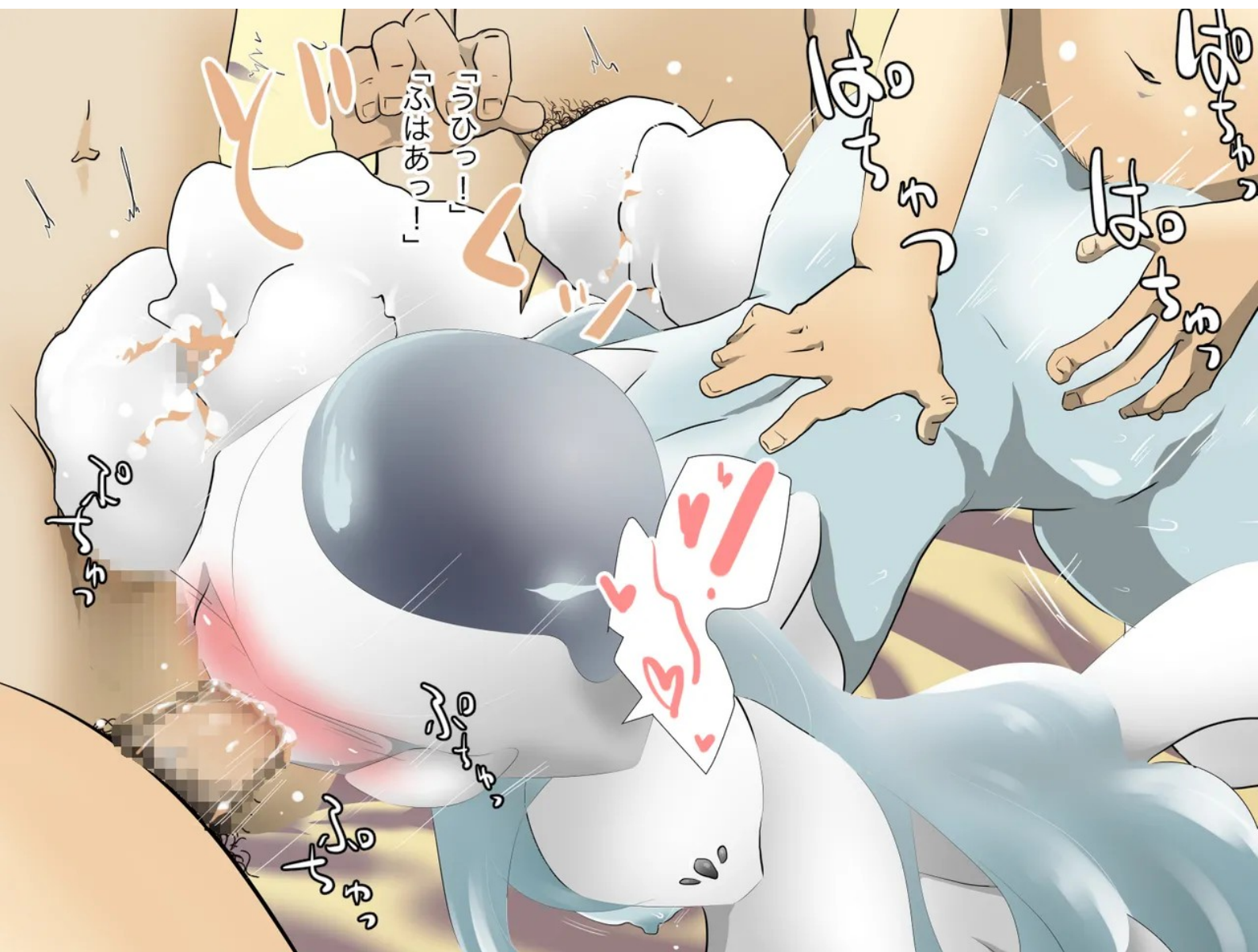
はっ
はっ
はっ

はっ
はっ
はっ

はっ
はっ
はっ

はっ
はっ
はっ

はっ
はっ
はっ



「うひっ!」
「ふはあっ!」

はっ
はっ

はっ
はっ

おっ

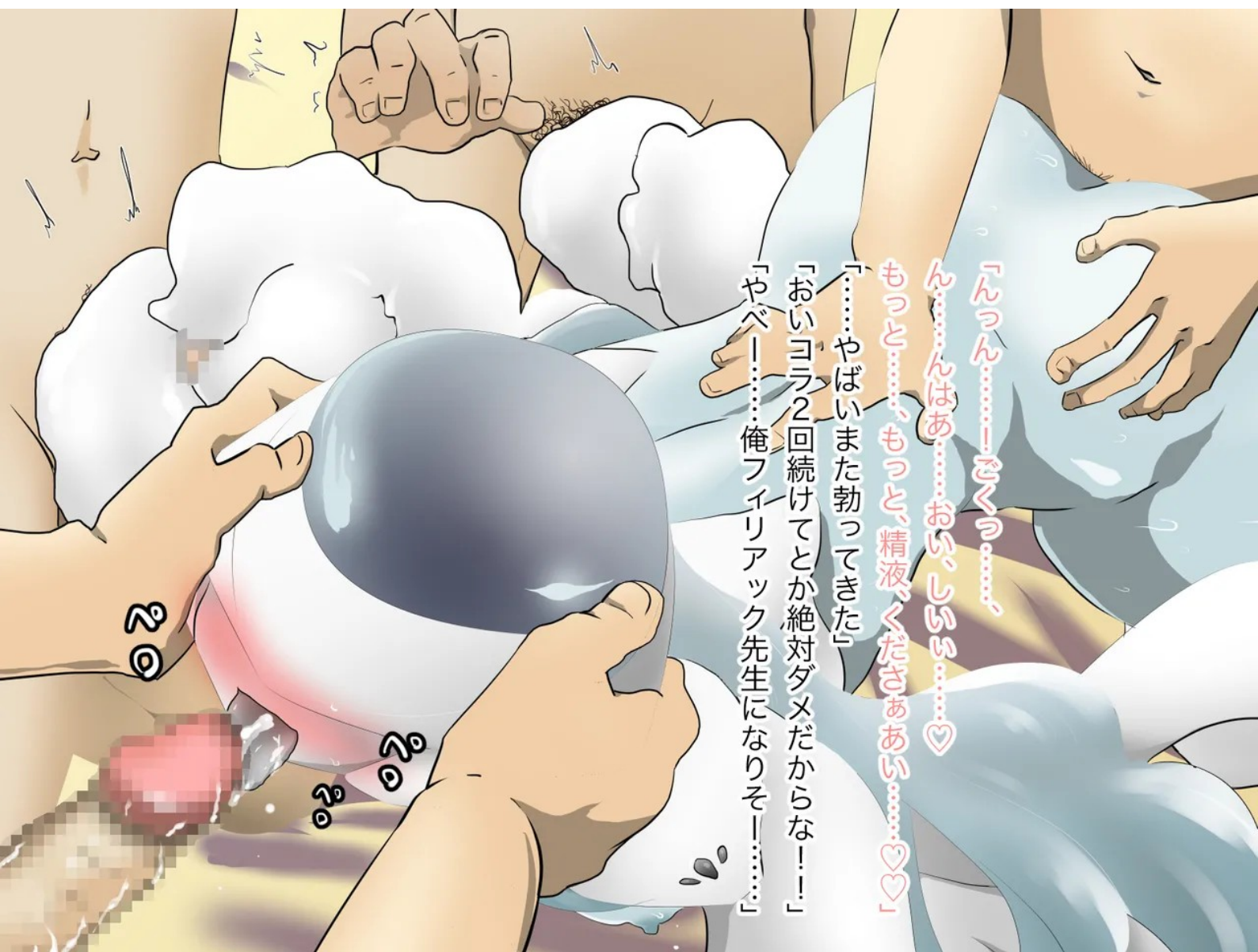
おっ

おっ



「んっん……！」

「……ッ!? なにやってんだ……？」



「んっん……ごっく……」
ん……んはあ……おい、しいい……♡
もっと……、もっと、精液、くださあい……♡♡
「……やばいまた勃ってきた」
「おいコラ2回続けてとが絶対ダメだからな!!」
「やべー……俺ファイリアク先生になりそ……」

『大丈夫、出産は気持ちいいことだよ。
怖くないーいい怖くないー』
だって君は、ロボットだからね』

「あぎい♡にゃんか、てきだあ〜」
あああああ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

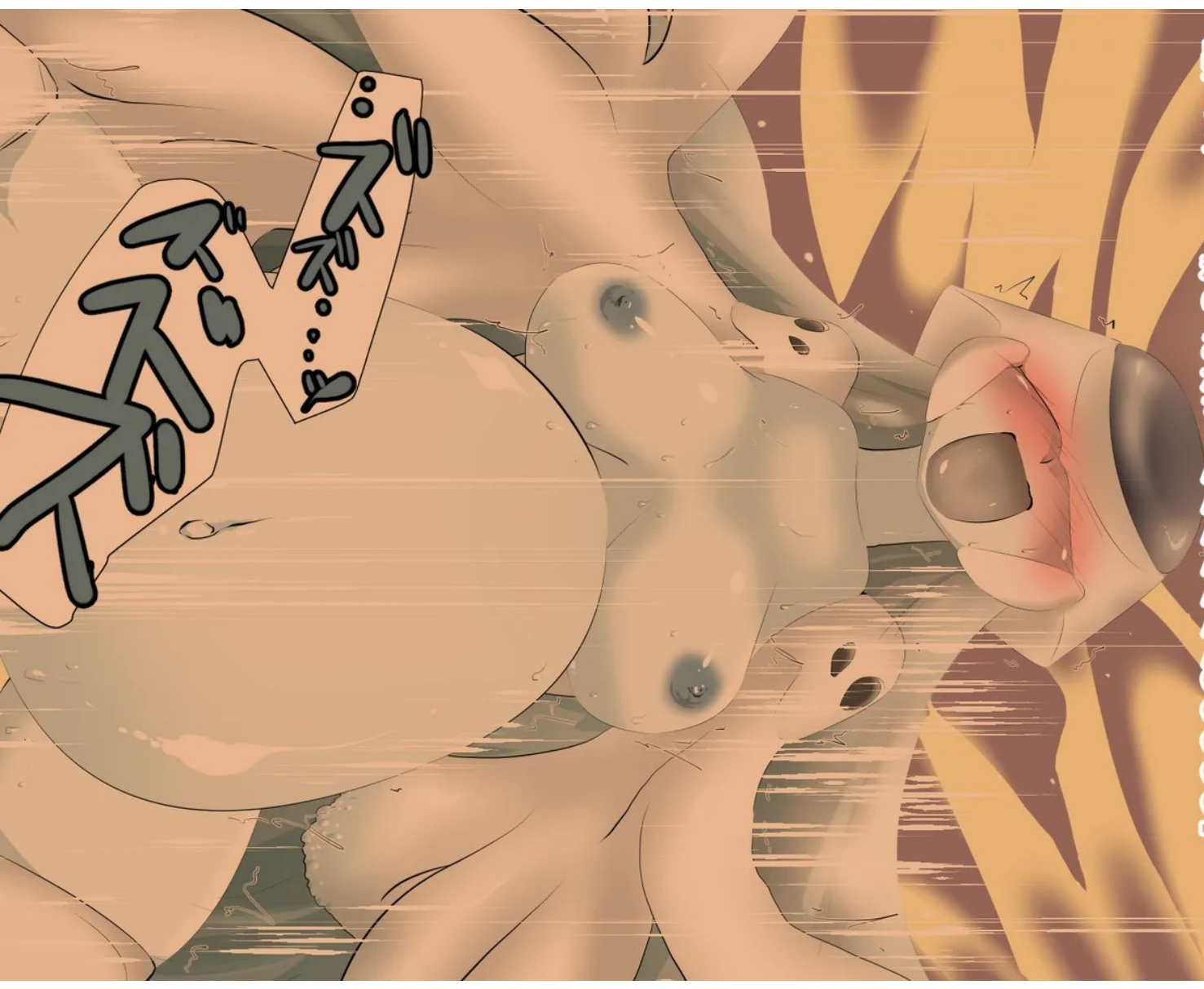


あぎい♡にゃんか、てきだあ〜



ひぎッ! あぐうあ
ああ~~~~~♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

「あぎいッーまだっーまだッ、いゝるうーああッああッ
出てるうッー私の、あがちゃんんんん♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」





「ん……♡♡あれ……？」

私の赤ちゃん、どこ……？」

「ああ気にしなくてららよ、
それより疲れただろっ？」

精液たくさん摂取して元気になろうね」

「んひう♡せーえきい……♡♡」

んひう……
んひう……

「ピグマが所属していたレジスタンスのことは既に
処理したはずだが、リーダーの下男がしぶとく
生き残り新しいレジスタンスを構築したらしい。」

この第一研究所が占拠されてしまった……何という事だ……。

しかし——あの馬鹿の目的——それも個人的な目的は、

ピグマを奪還することだ……」

「んやん……いやせのあさりせ、あん……」

「あさ、んじのジャンクマン」

「あ、あまをばらん、スーシヨ、ンローポーシヨ、ン
科学部門総括フイリアンク……」

「おっと私を撃てば君のたーらせつなロボットの
居場所が分からなくなってしまうや」

「なるー……」バグマンは、生きているのか……」

「んじ生きている……毎回とても楽しく満たされた日々を
送っています……」

『クグマ……本言、この部屋でクグマが……』

『……ふ……あ……このムネ……り……だ……』

『……』

「……ツツツ？！……？」

「……ああ……リーダーだあ……♡」

「……？！……？！……？！……？！……おっ、お前……っピグマ……、なのか……？」

「ふふふ、そーだよお……♡」

「わかんないよね？身体……外も、中も、声だって……」

「ぜーんぶ変わっちゃったから……♡」

「ご、ごんな……、うっ……」



「ハハハ死にはしないよ、ちよつとした……催淫剤だからね！ちよつと体が動かなくなつて理性が永遠に飛ぶ方の！」

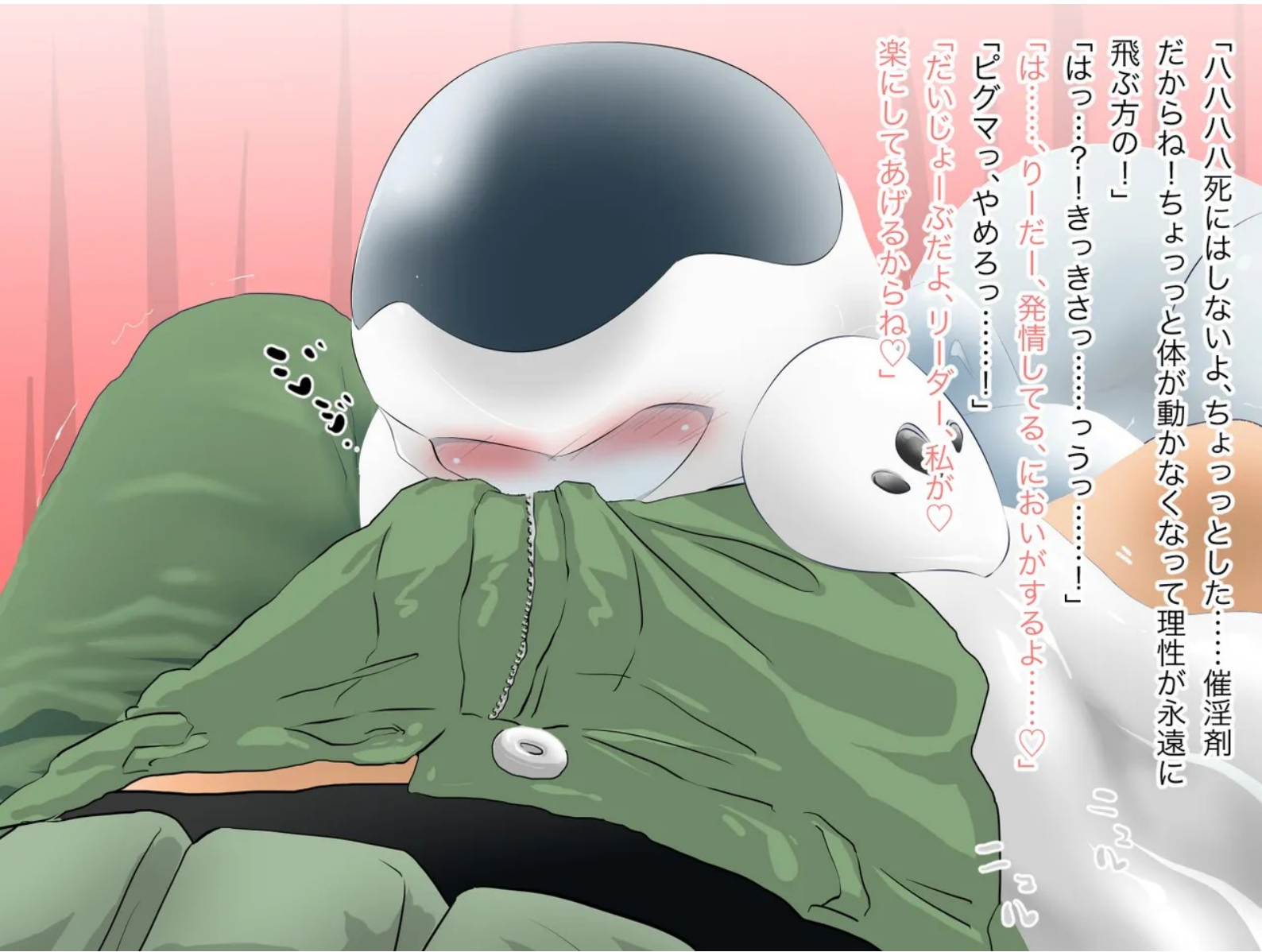
「はっ……？！きつきさっ……っ……っ……！」

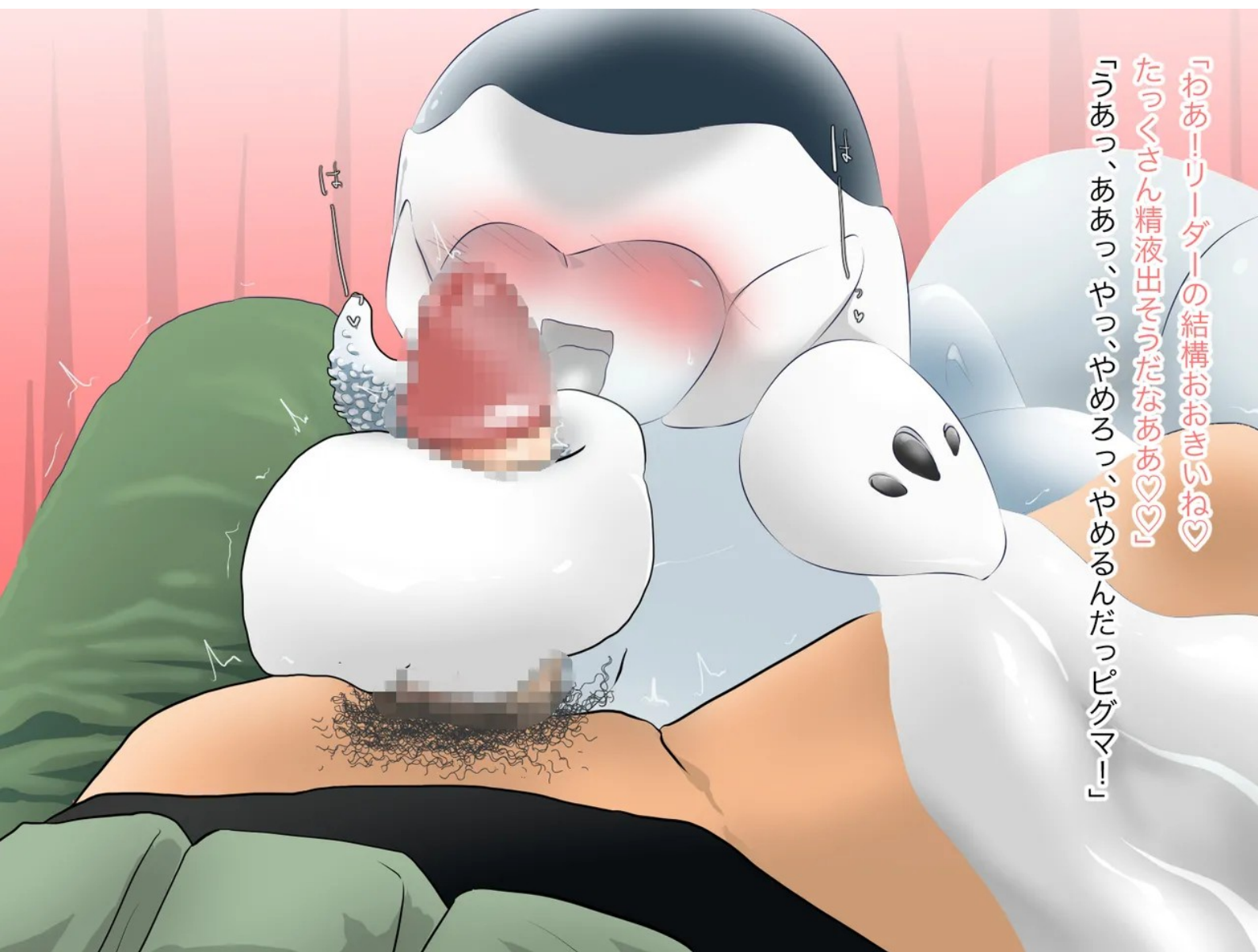
「は……りーだー、発情してる、においがするよ……♡」

「ピグマっ、やめろっ……！」

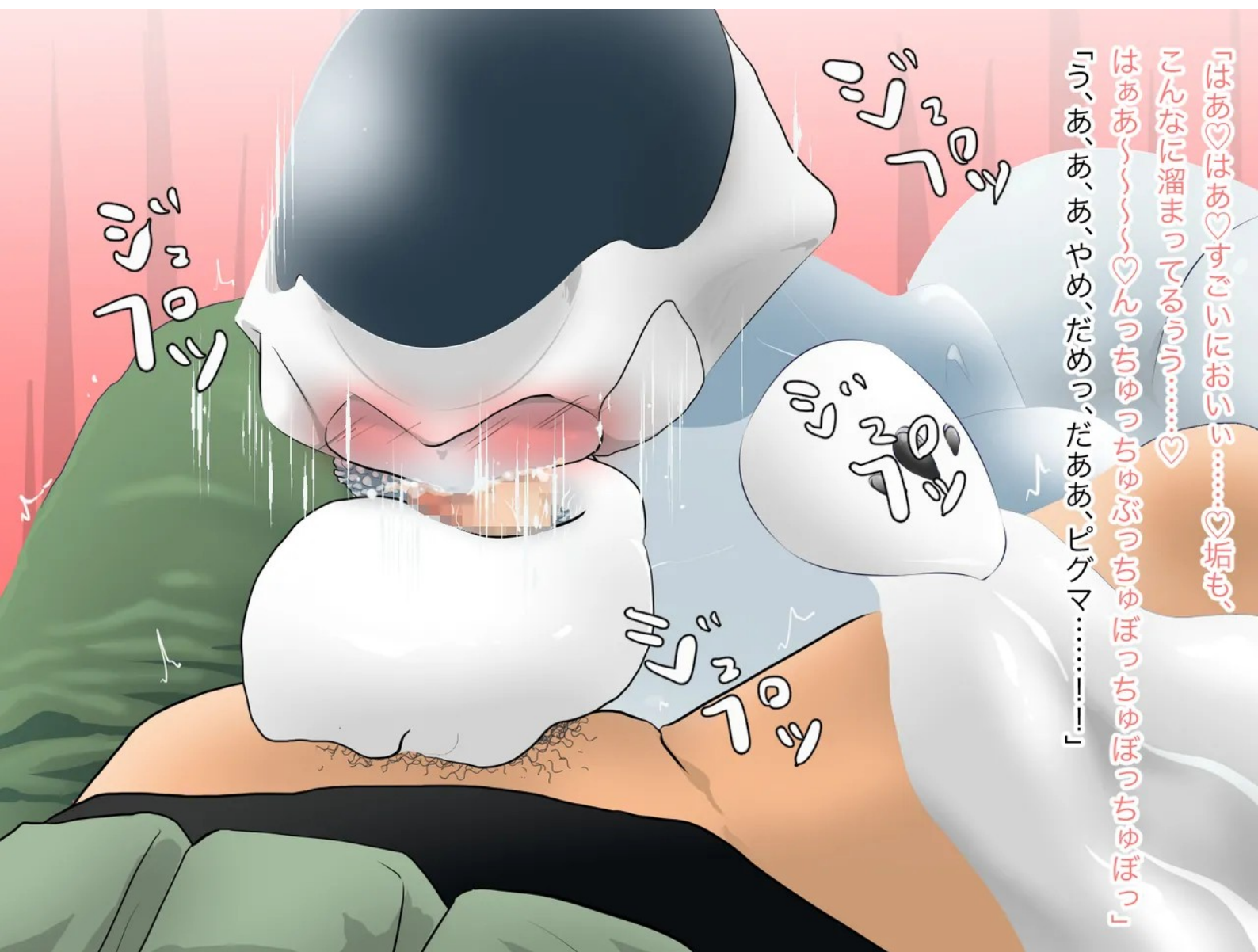
「だいじょーぶだよ、リーダー♡私が♡」

「楽しんであげるからね♡」





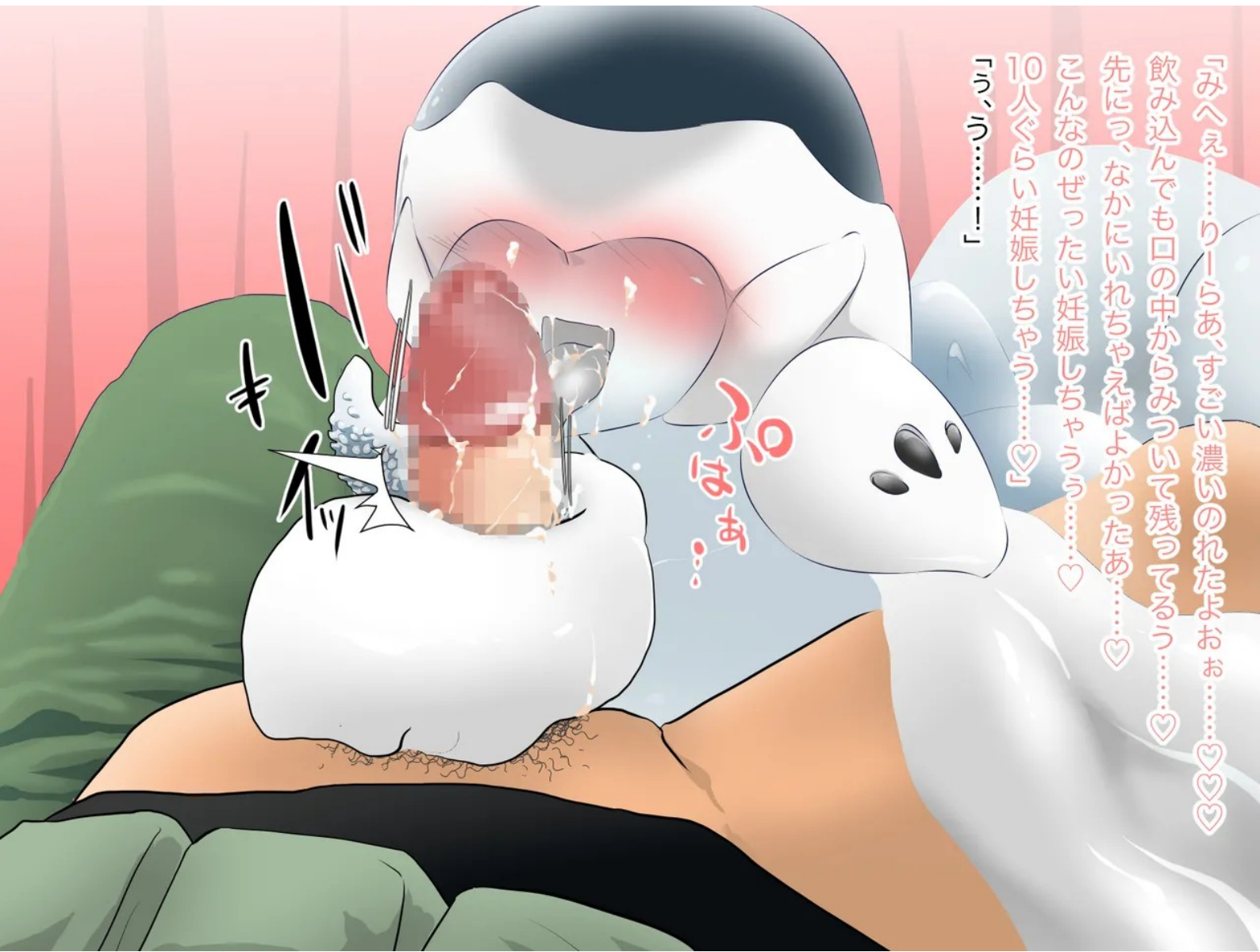
「わあーリーダーの結構おおいね♡
たっくさん精液出そうだなあ♡♡」
「うあっ、ああっ、やっ、やめるっ、やめるんだっピグマ！」



「はあ♡はあ♡すごいにおいしい……♡垢も、
こんなに溜まってるぅう……♡
はああ~~~~♡んっちゅっちゅぶっちゅぼっちゅぼっちゅぼっちゅぼっちゅぼっ」
「う、あ、あ、あ、やめ、だめっ、だああ、ピグマ……!!」



「……」
「……」



「みへえ……りーらあ、すごい濃いのれたよおお……♡♡♡♡♡
飲み込んでも口の中からみついで残ってるぅ……♡
先にっ、なかにいれちゃえばよかったあ……♡
こんなのぜったい妊娠しちゃうぅ……♡
10人ぐらい妊娠しちゃう……♡」
「う、う……！」

ふはあ……



「あああ……♡♡まだリーダーこんなに元気だああ♡♡
待っててね、いま肉便器マンコで抜いてあげるから……♡♡♡♡」
「ピグマツ、待っ……！」



「……」

「んひん……♡♡♡」

あーっ♡あーっ♡ちんぽっ♡じゃらん♡♡♡

おいしい気持ちいいしあわせだよっ♡♡♡

りー♡りーあもっ♡♡♡気持ちっ♡♡♡

いいね♡♡♡おっ♡♡♡♡♡♡♡

バキッ



「うあっーうぐっー！くそっ、くそっ……ピグマ……！」

「るおして悲しい顔するのお？りーらあ♡はやく♡

らしたいのお？わかった！ がんばるねえ♡♡♡♡♡」

「うあっ、あっああー！」

（ピグマ……、冷静で……、聡明な……戦士だったお前が……っ、

こんな、っ……う……！）

おちゅっ♡
おちゅっ♡
おちゅっ♡

おちゅっ♡
おちゅっ♡

おちゅっ♡
おちゅっ♡

(俺のせいであっ……俺のせいだ………(…))

「はああああん♡♡♡おーきくにやっってきたあああ♡♡♡リーダー♡
リーダー♡孕ませてっ♡赤ちゃんのもとほしいのお♡♡♡♡
出産したいイッ♡出産♡きもちいい♡♡きもちいいこと♡好きイ♡」







「ふへ……へへ、またデキちゃったあ……赤ちゃん……
デキちゃったあ……はやく……うまれないかなあ……
また、出産したいなあ……♡はやく……出産、したいい……♡♡」
「おはよう♪グマくん、今日もしあわせそうだね？」



「はあ……♡毎日おらしい精液をたくさん注いでいただき、
きもちいらぬさうなはっ♡していただいで、
とってもしあわせです♡」
もうすぐまた二週間に一回の出産がありますので
とても楽しみです♡♡」

『戦闘用ロボットから性処理ロボットに生まれ変わって
しあわせかお』

『はあ♡しあわせです♡♡♡これからもピクマは
皆さんの肉便器となり♡♡♡を産む肉便器ロボットとして
しあわせに生きていきます♡♡♡♡♡』



『むなしいなあ……』

……らら、どうせ取るに足らないヤツだったんだ。

創造主を越える、つくりものなんて、

所詮は夢物語なんだよ。

……ああ、

どこかに僕の聖母、

おぼつらならかなめ……』

END